

## 日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における 論理的文脈展開に関する比較研究

範 海 翔

### Abstract

In this paper, we aim to clarify the similarities and differences between native speakers of Japanese and Chinese learners of Japanese when both parties write expository texts in Japanese, with a special focus upon their ways of developing logical lines in text. In order to achieve this goal, we investigated opinion-expressing texts written in Japanese by a group of native Japanese and one of Chinese learners of Japanese, based upon Ichikawa's (1978) idea of "*Bun-Rensetu-Ron*" or Sentence-Connections.

Through our analysis, we have found that there are notable differences between the two groups in their use of connective patterns such as "*jyunsetu*" (copulative), "*taihi*" (contrastive), "*tenkan*" (topic-changing), and "*hosoku*" (complementary). We have also found that Chinese learners use more "*jyunsetu*" and "*tenkan*" patterns than native Japanese, and that native Japanese use more "*hosoku*" and "*taihi*" than Chinese learners. Meanwhile, we have found that both groups show a very similar tendency in their use of "*gyakusetu*" (adversative), "*tenka*" (additive), "*dooretu*" (appositive) and "*rensa*" (conjunction-less relevant chaining) patterns.

キーワード……中国人日本語学習者 意見文 文脈<sup>1)</sup> 展開 文の連接 接続表現

### 0 はじめに

近年、日本の大学・大学院に留学を希望する留学生が年毎に増え続けている。このような大学・大学院など日本の高等教育機関で勉学しようとする留学生にとっては、特に大学で必要とされる論理的に文章を構成する能力が要求されると思われる。つまり、講義や演習での課題レポートや学位論文を論理的また分かりやすく作成する能力が必要となる。ところが、日本語学習者による論説的文章には、一読しただけでは論理性が乏しいため、書き手の表現意図が伝わりにくいものが散見されている。その原因の1つは接続表現にあると考えられる。例えば木戸(2001)は学習者の意見文に列挙と添加の接続表現における問題があると指摘されているが、田代(2007)は学習者の意見文に順接的展開が多く、逆接的展開が少ないため主張の制限、反駁<sup>2)</sup>

の論理展開が日本語母語話者ほど多くないことを指摘している。

接続表現を手掛かりにし、日本語学習者の論理展開が考察される理由は、市川(1978:88)の「文脈における思考方式を端的に示すものは、文と文をつなぐ接続語句<sup>3)</sup>である。接続語句の使い方に注目すれば、筆者の思考のあとをたどることができる。」という指摘と関係するものである。従来から日本語学習者と日本語母語話者の文章の論理性に関する対照研究は接続表現に注目したものが多かった。接続表現が書き手の思考方式を反映するため、文章の論理展開を検討する際に、接続表現を中心にするのは間違いではないが、実際の書き言葉に接続表現が用いられる率はそんなに高くないのが現実である。書き言葉における接続表現の使用率については石黒(2009:74)が「書き言葉では、多くの場合 10%台であり、10%を切る文章も少なくない。」と述べている。この使用率の少ない接続表現のみを手掛かりにして、日本語学習者の論理的文脈展開の特徴を明らかにすることができるという考え方について筆者は疑問を抱いている。

そこで、本稿は意見文における接続表現の使用について考察するだけではなく、いままで注目されていない接続表現が用いられていない部分の文の連接実態も考察対象に取り入れることにした。そのため、本稿では作文における接続表現が用いられる部分と用いられていない部分をあわせて、市川(1978:88)の名称に従って、「文の連接」と呼ぶことにする。接続表現が明示されていない部分の論理的文連接については接続表現を「無理なく補う」<sup>4)</sup>作業を通して判断する。そして市川(1978)で示された接続表現の機能に基いた文の連接に関する類型を使い、日本語母語話者(JP)<sup>5)</sup>と中国人日本語学習者(CN)の意見文における連接関係を分類し、JPとCNの文連接関係の相違から、両者の論理的文脈展開の相違を考察する。

## 1 先行研究

論理的文脈の展開を具体化する文と文のつなぎ方を考える際に、接続表現の役割を無視することはできないと思われる。だから、日本語学習者の作文における展開を考察する際に、接続表現を手掛かりとする先行研究が多いのである。日本語母語話者と日本語学習者の作文における論理的文脈展開の特徴を分析する研究には浅井(2003)、田代(2007)がある。

日本語学習者に論理的文章を作成する指針を示すため、浅井(2003)は日本語母語話者と日本語学習者の作文における文連接、特に接続表現が明示されている部分に焦点を当てた。両者それぞれの接続表現の使用特徴と文脈展開における文連接の傾向を明らかにした。浅井(2003)の調査結果は学習者の方が文と文のつながりに用いる接続表現の数や種類が日本語母語話者より多いことを示している。また接続表現の文連接について、日本語母語話者の作文には論理的に結びつけるための接続関係の中で順接型の接続詞が少ないことを明らかにし、浅井(2003:94)は「母語話者では論理を積み重ねて文章を展開していく方法より、ある事柄を拡充して展開していく方法を接続詞を用いて示す傾向があるのではないかと思われる。それに対して、学習者で

は文章を論理的関係をはっきり分かるように示していると思われる」と述べている。浅井(2003:94)は以上の調査結果をさらに検証するため、「接続詞が現れない文間の接続についても調べる必要がある。」と強調した。

田代(2007)は、日本語学習者による論理的文章が、書き手の表現意図が伝わりにくいという特徴を持つことに注目し、JP と中級 CN の意見文における論理展開即ち文接続に関する接続節と接続詞について調査した。そして JP と中級レベルの CN の意見文の比較分析を通して、田代(2007)は両者の文章にどのような量的特徴があるかを探っている。分析の結果は、CN と JP の意見文に文と文のつながりによって形成される論理展開に相違があることを明らかにした。まず中級 CN は主に原因・理由節や順接の接続詞を用いて原因・理由を述べていたことが分かり、それに対し JP はそれ以外にも多様な表現を用いて述べていたことも調査で明らかになった。さらに、JP は仮定条件の条件節や逆接表現を用いて主張のサポート、反駁を行う部分が CN より多いという結果も見られた。最後に CN は順接の接続詞や恒常的条件の条件節で根拠を示す場合が多く、順接的展開が中心で逆接的展開が少ないため、主張の制限、反駁などの論理展開が JP ほど多くないことも明らかになった。以上の調査結果に基き、田代(2007:142)は「作文・文法指導への提言としては、意見を述べる際にその理由のみならず主張の反証、制限、例外への反駁・対策を加えるという展開も必要とされるため、それらの表現を文脈上で自在に運用できるようにすることが求められよう。」と述べ、学習者と日本語母語話者の文と文のつながり型によって形成された論理展開の相違について整理している。

これらの先行研究は日本語母語話者と日本語学習者の論理的文脈展開を考察するために、主に作文に用いる接続表現に着目している。だが、上で見た石黒(2009)の指摘のように書き言葉に使用されている接続表現が全文の 10%しか占めていないのであれば、文章に明示される接続表現だけへの注目は必ずしも文章の論理的文脈展開の全貌を明らかにするとはいえないだろう。つまり、筆者としては接続表現が用いられない部分への考察も必要なのではないかと考えている。

## 2 研究課題

以上の問題意識の下、本稿は以下の 2 つの課題を設定することにした。

- 課題 1. 接続表現だけの考察で、論理的文脈展開の実態が把握できるのかどうかを検証するために、JP と CN の意見文における接続表現の使用率を調査する。
- 課題 2. 接続表現が用いられていない部分に接続表現を「無理なく補う」という作業を行い、課題 1 の考察結果と合わせ、JP と CN の文の接続関係の相違を通して、両者の論理的文脈展開に各自の特徴があるかどうかを考察する。

手順としては課題1の調査で明らかになった接続表現の使用率がJPとCNの文脈展開の実態を明らかにすることができないという結果を得るならば、次の課題2に入る。

### 3 研究法

#### 3-1 接続表現の規定

課題1はJPとCNの意見文における接続表現の調査である。ここで本稿の接続表現の規定について述べておこう。石黒(2009: 73)は接続表現を「いわゆる接続詞のことで、おもに文頭に立ち、先行文脈を踏まえて、後続文脈に来る内容を予告し、読み手の理解を助ける表現の総称である」と定義している。単に接続詞という名称を用いればよいようなものであるが、接続詞ではなく接続表現という用語を用いる理由について、石黒(2009: 73)は「接続詞は品詞論上の概念であり、隣接する品詞との境界線を引くのに厳密な議論を必要とするからである。」と述べている。さらに「例証として『たとえば』、『とくに』、『さらに』が接続詞なのか副詞なのかということは、その判断が極めて難しいとしている。また接続詞という名称を用いると、『それにもかかわらず』や『換言すると』のような接続句が入るかどうか議論の対象になりかねない。」と指摘している。以上の接続表現の帰属に関する問題は本稿の作文の接続実態を調査する際にも感じていたことである。そこで、本稿はより全面的にJPとCNの作文の接続状態を明らかにするため、佐久間(1990,1992)、石黒(2009)などを参考にし、接続表現という名称を用いることにする。その中味は石黒(2009: 74)の「接続表現表」で示されている137種の接続表現である。紙数の都合でここでは割愛する。

また本稿の課題2の文の接続関係の認定は市川(1978)の類型法を用いたため、市川(1978)の「接続語句」と佐久間(1992)・石黒(2009)の「接続表現」の関係について簡単に述べておこう。両者の関係は仁田・益岡(2002: 135)によれば、「文章・談話における文連鎖<sup>①</sup>の解明には、市川の接続語句よりさらに広い接続表現という新たな概念を導入することにする。接続表現には、用言の連用形・節・文・連文・段落などの言語単位による接続機能を有する表現を含める。」とされている。つまり、接続表現は文接続の機能上接続語句と同様なものであるが、それはただ文章・談話の研究に応じて接続語句の範囲が拡大されただけなのである。というわけで、課題2の文の接続型の解明には接続語句の代わりに、接続表現という用語を採用したとしても矛盾はないことである。また接続表現という場合、複文の接続助詞も含めて考える立場もあるが、本稿では文を超えるレベルで働くもののみを接続表現として調査の対象とする。

#### 3-2 文の接続関係

接続表現の機能によって形成される文の接続関係の認定について、本稿では先行研究で頻繁に取り上げられた市川(1978)の「文の接続関係」の類型を援用する。市川(1978: 89-93)によれば、

「文の接続関係」は文と文との論理的関係であり、文脈形成の特徴により3つのグループと8つの基本類型に区分されている。その分類・定義及び代表的な言語形式は次の表1ようになる。表中の① - ⑧の全てが本稿で利用する項目である。

表1 市川(1978: 89-93)の「文の接続関係」

| (1) 論理的結合関係：二つの事柄を論理的に結びつけて述べる関係。 |   |
|-----------------------------------|---|
| ① 順接型                             | 前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型<br>[順当] = だから・ですから・それで・したがって・そこで・そのため<br>そういうわけで」それなら・とすると・してみれば・では(以上、仮定的な意)<br>[きっかけ] = すると・と・そうしたら<br>[結果] = かくて・こうして・その結果<br>[目的] = それには・そのためには                 |
| ② 逆接型                             | 前文の内容に反する内容を後文に述べる型<br>[反対、単純な逆接] = しかし・けれども・だが・でも・が」といっても<br>だとしても(以上、仮定的な意)<br>[背反・くいちがい] = それなのに・しかるに・そのくせ・それにもかかわらず<br>[意外・へだたり] = ところが・それが   |
| (2) 多角的連続関係：二つ(以上)の事柄を別々に述べる関係。   |   |
| ③ 添加型                             | 前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型<br>[累加、単純な添加] = そして・そうして<br>[序列] = ついで・つぎに<br>[追加] = それから・そのうえ・それに・さらに・しかも<br>[並列] = また・と同時に<br>[継起] = そのとき・そのへ・次の瞬間  |
| ④ 対比型                             | 前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型<br>[対比] = というより・むしろ(以上、比較してあとのほうをとる)」まして<br>いわんや(以上、比較されるものをふまえて、著しい場合に及ぶ)<br>[対立] = 一方・他方・それに対し(以上、対照的な対立)」逆に・かえって(以上、逆の関係の対立)」そのかわり(交換条件)<br>[選択] = それとも・あるいは・または |
| ⑤ 転換型                             | 前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型<br>[転移] = ところで・ときに・はなしかわって<br>[推移] = やがて・そのうちに<br>[課題] = さて(主要な話題を持ち出す)」そもそも・いったい(以上、原本的な事柄を持ち出す)<br>[区分] = それでは・では<br>[放任] = とまああれ・それはそれとして                       |
| (3) 拡充的合成関係：一つの事柄に関係して拡充して述べる関係。  |   |
| ⑥ 同列型                             | 前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型<br>[反復] = すなわち・つまり・要するに<br>換言するれば(以上、詳述・要約・換言)<br>[限定] = たとえば・現に(以上、例示・例証)」とりわけ・わけでも(以上、抽出)」  |

|       |  |
|-------|--|
|       | せめて・少なくとも(以上、最小限度)<br>〔換置〕=(肯定と否定の置き換え)  |
| ⑦ 補足型 | 前文の内容を補足する内容を後文に述べる型<br>〔根拠づけ〕=なぜなら・なるとなれば・というのは<br>〔制約〕=ただし・もっとも・ただ<br>〔補充〕=なお・ちなみに<br>〔充足〕=(倒置的形式)                             |
| ⑧ 連鎖型 | 前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型。(接続表現は普通用いられない)<br>〔連係〕(解説附加・見解附加・前置きの表現との連係・場面構成など)<br>〔引用関係〕(地の文と会話文の関係など)<br>〔応対〕(問答形式)<br>〔提示的表現との連係〕 |

市川(1978 : 89-93)

### 3-3 接続表現が用いられない部分の接続関係の認定

市川(1978 : 89)は「接続表現を文脈展開の指標とする考察には接続表現の用いられない時も多い」と述べている。こういう場合は市川(1978:100)は文と文の意味関係を踏まえ、該当するところに接続表現を「無理なく補う」方法を取ることによって文と文の接続関係を明らかにする方法を取っている。具体的な考え方として、市川(1978:100)を挙げた例と説明を見てみよう。

①詩人も小説家も脚本家も、随筆を書きます。②新聞記者も、科学者も、教育家も、政治家も、実業家も、随筆を書きます。③しかし、そういう専門家として、あるいは職業人として書いては、よい随筆はできません。④専門家なり、職業人なりから、ひとりの人間にかえて書いたものでないと、すぐれた随筆にはなりません。⑤そういう意味では、随筆は人間手記であり、人生の報告書であるといえましょう。(西尾実「ことばの芸術」)

①の文と同類の内容が、②の文で述べられている。②の文頭に接続表現の「また」や「さらに」を無理なく補うことができる。①と②は、「添加」として接続している。③の文頭に「しかし」が用いられるため、②と③は「逆接」となる。④の文は、③の内容をさらに詳しく説明した文。③と④の関係は「同列」である。④の文頭に、接続表現の「つまり」などを容易に補うことができる。⑤は④から導かれてくる結論的な事柄を述べた文である。「そういう意味では」、「順接」を表す接続表現と考えることができる。

市川(1978 : 100)

本稿は以上の市川(1978)の接続表現を「無理なく補う」方法を使って JP と CN の文と文の間の論理関係の解明を目指した。このような解明作業は主観的判断に伴う変異の幅が考えられるため、筆者と1名の協力者として接続表現を「無理なく補う」ための作業を実施した。さらに、客観性を保つため、2009年10月新潟大学言語学ゼミの学生20名に同じ作業を行ってもらった。こ

の二回の作業の結果の分析を通して、本稿における JP と CN の接続関係が明らかになった。

## 4 調査資料

本稿では国立国語研究所が作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母国語訳との対訳データベース ver. 2」を利用する。同データベースより JP 及び CN が書いた「喫煙についての規制」に関する日本語の意見文、各 43 編と 44 編、合計 87 編を取り上げ分析対象とした。本稿で用いた日本人向け、学習者向けの「課題 2」<sup>7)</sup>は以下の通りである。

### 日本人向け

以下の課題からひとつを選び、日本語で 800 字程度の作文を書いてください。日本の事情をよく知らない国外の人びとに読んでもらうつもりで書いてください。

喫煙を規制するかどうかには賛否両論があります。喫煙は百害あって一利ないものであるから、公共の場所ではたばこを吸えないよう法律で規制すべきだ、またたばこのコマーシャルは子どもに悪影響を与えるから、テレビ等での放送も厳しく制限すべきだ、という意見がある一方、喫煙者にも喫煙の権利があるはずだから、規則で一律に禁止するのは不当である、という意見もあります。

この件に関するあなた自身の考えを、規制反対か賛成か必ずどちらかの立場に立ったうえで、日本語で論じてください。

### 学習者向け（原文は振り仮名つき）

次の文を読んで、自分の意見を 800 字くらいの日本語で書いてください（この作文は日本人の学生や大学の先生が読みます）。

今、日本でたばこのことが問題になっています。ある人は言います。「会社やレストラン、バスや電車など公共の場所でたばこを吸えないよう規則を作るべきだ。また、たばこのコマーシャルは子どもに悪い影響を与えるから、テレビで放送できないようにするべきだ」。

一方、次のように言う人もいます。「規則を作って禁止するのはおかしい。だれにもたばこを吸う権利があるはずだ」。

あなたはどのように思いますか。たばこについて、あなたの意見を書いてください。

以上が本稿の調査資料である。続いて調査結果を述べよう。

## 5 結果

### 5-1 課題 1 の結果

まず上記の研究課題の中の課題 1 の結果、JP と CN の接続表現の使用率を見てみよう。結果は、表 2 のとおりである。

表 2 JP と CN の意見文における接続表現の使用状況

| データ<br>対象 | 作文数<br>(編) | 総文数<br>(文) | 接続表現<br>(個) | 接続表現の<br>使用率(%) | 接続表現の未<br>使用率(%) |
|-----------|------------|------------|-------------|-----------------|------------------|
| JP        | 44         | 715        | 175         | 24.4            | 75.6             |
| CN        | 43         | 790        | 225         | 28.4            | 71.6             |

表 2 は 44 編の JP の意見文が 715 文<sup>8)</sup>からなり、43 編の CN の作文中には 790 文を示している。CN の文数のほうがやや多い。全文章中の文と文のつながりには JP が 175 個の接続表現を用いているのに対し、CN は 225 個の接続表現を用いている。接続表現の使用率は以下の算式に基いて計算した。

$$\text{接続表現の使用率} = \frac{\text{接続表現の総使用数}}{\text{総文数}} \times 100\%$$

結果は JP の接続表現使用率は 24.4%であり、CN は 28.4%である。JP と CN の文接続に用いられる接続表現の使用率が共に 30%未満であることが明らかになった。この 50%以下という接続表現の使用率に基き、課題 1 の結論として、接続表現だけの研究によっては、総ての文章の論理的文脈展開即ち文の接続関係の実態を明らかにすることはできないと判断し、上記の課題 2 で更に検討する必要があると考えるに至った。

また今回の統計では意見文における CN の接続表現の使用率が JP よりやや多めであることも見られた。この結果は浅井(2003)、田代(2007)の調査と一致している。

### 5-2 文接続型の考察結果

課題 1 の結果を通して、接続表現に関する調査だけでは JP と CN の文脈展開の全貌を明らかにすることができないということが分かった。つまり、JP と CN の意見文における文接続関係を把握するには接続表現が用いられていない所の文と文の意味関係を考察する必要があると考えられる。課題 2 の「補う作業」で得た接続関係の結果と課題 1 の結果とを合わせた。JP と CN



| <div style="text-align: center;">                     接続関係(型)<br/>                     合計と割合                 </div> | 無し <sup>9)</sup> | 順接   | 逆接   | 添加   | 対比  | 転換  | 同列   | 補足   | 連鎖   |
|---|------------------|------|------|------|-----|-----|------|------|------|
| 合計 JP   | 44               | 91   | 74   | 144  | 34  | 18  | 124  | 109  | 77   |
| 割合(%) JP  | 6.2              | 12.6 | 10.4 | 20.0 | 4.8 | 2.5 | 17.4 | 15.2 | 10.8 |
| 合計 CN   | 43               | 137  | 77   | 182  | 16  | 35  | 157  | 62   | 81   |
| 割合(%) CN  | 5.4              | 17.3 | 9.6  | 23.1 | 2.0 | 4.4 | 19.9 | 7.9  | 10.2 |

表 4 JP と CN の割合率の差

| 接続関係(型)  | 順接  | 逆接  | 添加  | 対比  | 転換  | 同列  | 補足  | 連鎖  |
|----------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 割合率の差(%) | 4.7 | 0.8 | 3.1 | 2.8 | 1.9 | 2.5 | 7.3 | 0.6 |

|          |     |     |     |     |     |     |     |     |
|----------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 接続関係(型)  | 順接  | 逆接  | 添加  | 対比  | 転換  | 同列  | 補足  | 連鎖  |
| 割合率の差(%) | 4.7 | 0.8 | 3.1 | 2.8 | 1.9 | 2.5 | 7.3 | 0.6 |

## 6 考察

- 259 -

ないため、いったい文連接全体に相違があるのかあるいは部分的相違があるのかについて判断しにくいものとなった。つまり以上の JP と CN の 2 集団の間に相違があるかないかについてはさらに考察する必要があると思われる。というわけで、本稿は JP と CN の意見文に使われる 8 種の連接型に関して、SPSS 統計パッケージ(Ver.14.0)を使って分析した。この方法による分析で有意差が見られる連接型が、最終的に JP と CN の文連接の全体あるいは部分に差があるものだと考えられる。具体的には JP と CN の意見文における 8 種の連接型の分布<sup>10)</sup>をそれぞれに統計し、JP と CN の 2 群の分布データの  $t$  検定を行った。

次の表 5 は JP と CN の順接型に関する分布の一部である。このような統計法を用いて、順接型の JP と CN の各意見文における分布状況を統計した。さらに順接型に続けて、逆接型・添加型・転換型・補足型・連鎖型・同列型・対比型の順で JP と CN の連接型の有意差の有無について考察した。

表 5 JP と CN の意見文における順接型の分布(一部分だけのサンプル)

| 文章<br>番号 | JP の意見文の<br>順接型使用数 | CN の意見文の<br>順接型使用数 |
|----------|--------------------|--------------------|
| 1        | 1                  | 4                  |
| 2        | 4                  | 2                  |
| 3        | 2                  | 2                  |
| 4        | 2                  | 2                  |
| 5        | 1                  | 2                  |
| 6        | 3                  | 2                  |
| 7        | 2                  | 4                  |
| 8        | 3                  | 2                  |

$t$  検定で得られる各連接型の有意確率<sup>11)</sup> ( $P$  値)は表 6(次の頁)のとおりである。この有意確率 ( $P$  値)は有意水準( $\alpha$ )と比較し (今回の有意水準<sup>12)</sup>は  $\alpha=0.05$  と設定した。)  $\alpha$  より小さければ( $P < .005$ )、JP と CN は当該の連接型の使用傾向に有意差があることを意味する。

表 6 に示したとおり、JP と CN の文連接型に順接型・対比型・転換型・補足型に有意差( $P < .005$ )

が見られた。一方、逆接型・添加型・同列型・連鎖型の有意確率が有意水準より高いため( $P > .005$ )、JP と CN の間に有意差が見られなかった。この結果は、意見文の文脈展開に CN の順接型や転換型の割合(表 3)は JP より高いことが信頼でき、また JP の補足型や対比型の割合(表 3)は全体的に CN を上回っていることも成立であると意味する。この CN の順接型が JP より多い、JP

表 6 各接続関係の  $t$  検定結果

| 接続関係 | 有意確率( $P$ 値) | 有意水準( $\alpha$ )との比較 ( $\alpha = 0.05$ ) |
|------|--------------|--|
| 順接型  | .043         | $P < .005$                               |
| 対比型  | .001         | $P < .005$                               |
| 転換型  | .001         | $P < .005$                               |
| 補足型  | .043         | $P < .005$                               |
| 逆接型  | .937         | $P > .005$                               |
| 添加型  | .083         | $P > .005$                               |
| 同列型  | .057         | $P > .005$                               |
| 連鎖型  | .938         | $P > .005$                               |

の補足型が CN より多いという傾向については田代(2007)の接続表現を中心とした学習者と日本語母語話者の意見文の文接続の調査において既に指摘されている。今回の調査も、それと一致する結果が得られた。一方、今回の調査は接続表現が用いられていない部分の文の接続関係も含めて調査したため、新たな発見として JP の対比型の使用が CN より多いこと、また JP より CN の方が転換型が多いということが分かった。対比型の多用を通して、JP は主張を述べる際に、主張の立場から論を展開するだけではなく、自分の主張に防衛力を持たせるため反証の立場にも配慮しながら論を進めていくのだと思われる。それに対し、CN はこのような論の展開型をあまり取らないことが分かった。例(1)、(2)は JP の意見文における対比型の例である。

(1) 喫煙の規制に賛成する側の言い分としては、喫煙は百害あって一利なしだから、たばこのコマーシャルは子どもに悪影響を与えるから、などである。それに対し反対する側は、喫煙者にも喫煙の権利があると訴える。[JP]

(2) たばこを吸っている人の近くにいただけで、肺が汚れていくのだ。そして、肺ガンになる確率は、喫煙者よりも多いのである。(一方)<sup>13)</sup>喫煙者の主張する喫煙の権利も分からないわけではない。[JP]

さらに、JP は文脈展開の上で主張を支える論点として、根拠付け、実例あげなどの補強作業に取り組んでいるのに対し、CN は論を支える論点の補強にそれほど取り組まず、むしろ論を支えるより多くの新論点や新話題の発掘に力を入れていることが分かった。このように文脈展開における文接続の方法の相違として、JP は補足の使用が CN より多く、CN は JP より転換型が多いということが明らかになった。たとえば、例(3)のようである。

(3) ①喫煙することによって喫煙者の体をむしばむだけでなく非喫煙者の体にも害を及ぼすのです。②例えばもしある1つの部屋に5人の喫煙者と1人の非喫煙者がいたとします。③その中で一番肺に害を成すのは非喫煙者なのです。④(なぜなら)それはタバコの煙に含まれて発せられるふくりゅう煙という煙の方が害になるからです。⑤(だから)このように自分だけでなく他人に危害・被害を与えてしまうことは絶対に許してはいけないことだと思います。⑥タバコを喫う権利は誰にでも成人者ならありますが他人の権利を犯すことはできないと思いますので公共の場でタバコを規則で一律に禁止するべきだと思います。[JP]

例(3)を定式化すると(4)のようになる。つまり①の主張の妥当性を証明するため、JP は②の例証、③の連鎖(前置き表現との関係)<sup>14)</sup>、さらに④の根拠付け、⑤の結論、および⑥の連鎖(見解付加)などを加えて、論点①の補強のために工夫している。

(4) ①論点提出+②実例(同列)+③連鎖型+④補足型(なぜなら)+⑤順接型(だから)  
+⑥連鎖型

一方、CN には JP のような論点に対する補強という傾向が見られなかった。たとえば、例(5)のように①の論点を示した後、すぐ②転換型で新たな論点に入っている。そして③および④の添加によってさらに新話題を導入している。定式化すると①論点提出+②転換+③添加+④添加となる。

(5) ①逆にたばこがきれいな人もおおぜいいます。②(さて)じつは、たばこを吸うのはほんとうに体によくありません。③それに、まわりの人にもっとよくない影響を与えます。④また、お金をかけますし<sup>15)</sup>…つまり、利点がぜんぜんないと思っています。[CN]

また以上の相違を除けば、JP と CN の意見文の文脈展開には逆接型・添加型・同列型・連鎖型の使用に関してほとんど差がないことが分かった。この結果を通し、異なる文化や言語に所属する人間であっても人間共通の論理的思考方式があり、そのため文章形成上に以上の類似点・交通点が見られるのだといゆことを示唆していると考えられる。

## 7 まとめと今後の課題

JP と CN の意見文における論理的文脈展開の特徴を探るため、本稿は課題 1 と課題 2 を立てた。課題 1 の考察を通して、JP と CN の接続表現の使用率が低いため、単なる接続表現の分析だけでは JP と CN の文脈展開即ち文の接続関係の解明はできないことが確かめられた。課題 1 の結果に基き、課題 2 では JP と CN の意見文に対し、「無理なく接続表現を補う」作業を行い、JP と CN の意見文における各文の接続型の使用状況を明らかにした。さらに JP と CN の意見文における論理的文脈展開を支える文接続の論理性の相違を探るため、各文章における接続型の分布の  $t$  検定を行い、 $t$  検定を通して JP と CN の順接型・対比型・転換型・補足型の使用率には有意差があり、逆接型・添加型・同列型・連鎖型の使用率には有意差がないことを明らかにした。

今回の調査で明らかにした順接型と補足型における JP と CN の相違は先行研究の田代(2007)でも指摘されているが、新たな発見として多角的文接続関係<sup>16)</sup>によく使われる対比型と転換型において JP と CN の間に相違があることが分かった。CN の意見文は逆接型より順接型の多用のため、主張の制限に関する論理展開が JP ほど多くない。また CN は転換型の多用と補足型が少ないため、新話題や論点に対する解説や論証が不十分になる傾向も見られた。この現象は、CN の主張の論理性や説得力が落ちる原因に繋がる可能性があり、CN の日本語能力や中国語文章構造などの要因に影響を受けたものだと考えられる。この問題の解明は使用率などの量的な分析だけではなく、CN の意見文の質的分析が必要なのではないかと思っている。これについては今後の研究でさらに検討したいと考えている。

一方 JP による対比型と補足型の多用から、JP の主張展開は主張の正面だけではなく、論点の防衛力を高めるため、反証の面からの論説も少なくないと言える。この場合はとくに対比型がよく用いられる。このような論の展開型は CN においては少なかった。また JP と CN の意見文における文の接続関係の相違に加えて、今回の調査は JP と CN の間に文の接続関係に共通の傾向があることも明らかにした。この結果は、人間の論理的思考方式というものが文化や言語の隔たりを超え、重なる部分も多いことを証明している。本稿はあくまで量的な調査であり、以上の JP と CN の文脈展開における異同は質的調査でさらに検証したいと考えている。これは今後の課題としたい。

<注>

- 1) 本稿でいう文脈は文章の文脈のことを意味する。定義すると、「最初の文から次の文へ、さらに次の文へという、隣りどうしの文の意味の関係である」のことである。永野(1986:104)参考。
- 2) 「主張の制限、反駁」について、田代(2007:140)は「接続詞を用いることにより、書き手は自分と対立する意見に反論したり、内容の正当性に制限を加えるという議論を精緻化を行い、自分の意見をより強いものとしようとしている。」と述べられている。例として田代(2007:140)は「(10) 私はタバコが嫌いですから、規制には基本的に賛成です。しかしただ単に禁止一点張りでは、その規制は功を奏することはないでしょう。」と挙げた。
- 3) 市川(1978)の用語である。佐久間(1990)の接続表現と対応する名称である。近年文章・談話の研究では接続表現という名称を用いることが多い。
- 4) 市川(1978:89)は「接続語句は、文脈における思考方式を端的に示しはするが、実際には、接続語句の用いられない場合も多い」という考え方を出発点として、文の接続関係を解明するために、「無理なく接続語句を補う」ことを提唱している。
- 5) 以後日本語母語話者は JP、中国人日本語学習者は CN と呼ぶことにする。
- 6) 文の連接。
- 7) 「日本語学習者による日本語作文と、その母国語訳との対訳データベース ver. 2」は課題 1「あなたの国の行事について」と課題 2「たばこについてあなたの意見」からなっている。本稿は課題 2 の作文について考察した。
- 8) 高橋・伊集院(2006)の統計と一致している。高橋・伊集院(2006:82)を参照。
- 9) 接続関係「無し」は各文章の第 1 文にあたる。
- 10) JP と CN の各意見文における文連接型の分布状況。
- 11) 統計的仮説検定において、帰無仮説のもとで得られた検定統計量が実現する確率。
- 12) 統計的仮説検定を行う場合に、帰無仮説を棄却するかどうかを判定する基準。5%あるいは 1% がよく使用される。
- 13) (\_\_\_\_)は「無理なく補う」作業で想定した接続表現を表す。
- 14) 市川(1978:92)における連鎖型の下位分類の一種であり、次の「見解付加」も同じである。
- 15) 正しい日本語表現は「お金がかかります」であるが、本稿は CN のミスをそのままにし、直さなかった。
- 16) 二つ(以上)の事柄を別々に述べる関係。添加型・対比型・転換型がある。市川(1978:93)を参照。

<参考文献>

- 浅井美恵子 (2003) 「論說的文章における接続詞について－日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較」『言葉と文化』4、pp.87-98。
- 石黒 圭 (2008) 『文章は接続詞で決まる』光文社新書。
- 石黒 圭 (2009) 「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋留学生センター紀要』12、pp.73-87。
- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版。
- 木戸光子 (2001) 「作文教育のための留学生と日本人学生の意見文の比較」『日本語教育学会春季大会予稿集』pp.97-102。
- 佐久間まゆみ (1990) 「文段認定の一基準(Ⅱ)－接続表現の統括－」『文藝・言語研究 言語篇』17、筑波大学文芸・言語学系、pp.35-66。
- 佐久間まゆみ (1992) 「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学文学部紀要』41、pp.9-22。
- 高橋圭子・伊集院郁子(2006)「疑問文に見られる“Writer/Reader visibility”－中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較－」『日本語教育』130、日本語教育学会、pp.80-89。
- 田代ひとみ (2007) 「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教

育研究論集』14、pp.131-144。

永野 賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店。

仁田義雄・益岡隆志(編) (2002) 『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店。

主指導教員（福田一雄教授）、副指導教員（高田晴夫教授・朱継征教授）